



平成29年10月3日 認定NPO法人 あさがおにて

尾崎 史さん
おざき ふみ

(認定NPO法人あさがお①) 所長)

高知県出身。大学進学を機に上京され、社会学専攻で差別と偏見についてゼミで学ぶ。学生時代は、障害者施設に通うサークルにも所属。後述する幼少期の体験の数々から、この頃から福祉に対しては特別な思いがあった。卒業後は三十歳まで高知で医療ソーシャルワーカー(以下MSW)の職に就く。結婚を機に長野へ引っ越し、専業主婦を四年程したのちに、滋賀県へ移住。滋賀でも再びMSWを十年以上勤める。その後、NPO法人あさがお設立時から関わり、現職となる。

M S W からあさがおへ

北川 M S W からあさがおにつながつていく経緯について、お話を伺いたいと思います。

尾崎 そうですね。M S W の仕事が面白くて私はすごく好きでした。「医療の中でやる」というしんどさはありますけど、やりがいがあったって、そこで辞めたいと思ったことは一度もなかったんです。けれども、ひっかかるものもあって。患者さんは病院を出て行ったらどんな生活をするんだろう、その人の家での生活はどうなっているんだろうとか、そういうところまで知りたいじゃないですか。それを在宅サービスの方にバトンタッチして、情報を仕入れることはできても、最後まで見届けることができないというジレンマがあつて、そういうことが病院の枠の中ではできないことの一つとしてありました。

それから、特に管理職になると、病院の利益を考えると動かないといけない時もあるって、自分をまっすぐの中立の立場におくことが難しいところが出てきたんです。なので、

① N P O 法人あさがお・・・高齢者・障害者が自らの意思に基づいて地域生活を送ることができる社会を目指し、その権利を擁護するための相談や成年後見活動を行う団体として二〇〇五年に設立。

患者さん、利用者さんという人達はどこを見ているのか。何が本当にこの人にとって大切なのかといった時に、余計なものが入り込んでくるんですね。例えばネグレクトの状態の家庭環境にそのまま帰ってもまた同じことになって入院するのは目に見えていて、その環境を整えないといけないのに、でも病院は早く退院をと言う。「何とか退院してもらわないといけないのかな」、「いや違う」、というような、そういうものが。

北川 しがらみのようなものに葛藤があつたんですね。

尾崎 そうですね。病院の中では戦つたつもりです。ドクターを筆頭としてナースがいて、その他全部医療職がいて、その人達の指示のもとでやるのではなくて、医療の中に福祉の視点を持って、ものを言うということが必要だと思つていたので、働きかけました。やっぱり、最終的に一人ひとりの医療職の人達も患者さんのためにということを前面に出すと動いてくれるんです。ですが、葛藤は確かにあつたので、あさがお立ち上げ時に誘われた時に、何にも遠慮せずに、今までやってきたこと、疑問に思つていたこと

ヒントが見つかるのではないかなと思っただけです。なので、これが最後の職場になります。誘いに乗ってやってみようかなと。

北川 素朴な疑問ですが、大変じゃないんですか。人の後見をすると思うと、すごくエネルギーが必要だなと思うのですが。

尾崎 すごく責任がある仕事だと思っています。人の人生と一緒につきあっていくわけですから。その人の代わりに動くのではなくて、その人と一緒にその人の意思に添って動くので、逆に難しさを感じます。責任もあるけれども、やりがいもあるなという仕事ですね。ただ、個人でこれを引き受けていたら、私などは押しつぶされそうになると思うのですが、法人でやっているの、助かっている部分があります。一人の人に何人も職員が関わっているの、一人で全部決めなくてはいけない、ということではなくて、法人内で相談しながら分らないところを教え合いながらできるので、その辺は法人の良さかなと思っています。

印象的なケース

北川 あさがおで長いこと後見に取り組まれていると思いますが、何か尾崎さんの中で、印象的なケースがあれば、

教えていただけませんか。

尾崎 それはもう全部が印象的で（笑）。強いて言えば、最近、十年を超えるケースの方が、立て続けに三人亡くなったんです。それで私、ショックで寂しくて。私がこの法人の中で一番古い人間なんです。ですから、十三年目くらいになる一番古くからのケースをもっているんです。

その方はすごく印象的な方なんです。日本人のお母さんとアメリカ人のお父さんの間に生まれ、一歳の時におばあちゃんと一緒に交通事故に遭って、おばあちゃんは亡くなって、本人は知的障害を持つようになった。理由はわかりませんが、お父さんもお母さんもどこかに行ってしまった。母方の妹さん夫婦に預けられたけど育てきれなくなって、東京の方なんです。滋賀県のある施設に預けられました。その後、成人になったので出ないといけないということで、当時の役所の方が何を思ったか救護施設に預けたみたいなんです。他にいくところがなかったんでしょうね。でも、血気盛んな二十代ですので、車を見たら荷台に上がるし、女の子を見たら追いかけるし。救護施設では対応できないというので、知的障害者なのに、精神科の病院に入院されました。それから、ずっと精神科の病院に入院されていたんです。そうすると、障害年金がどんどん貯まっていって、それを病院が管理していたんです。昔はそういう

のがたくさんあったんです。それで、こんなに貯まると病院で管理できないということになって、成年後見の市長申立てを行い、うちが受任しました。私が担当になって、その病院にいる彼に会いに行きました。知的レベルはその時に二歳ぐらいと言っていたかな。「いや」とか「あほ」とか、そんな単語しかしゃべれなかった。「盗食」という言葉を病院では使っていました、人のものを取って食べたり、トイレで隠れて食べていることもありました。彼は、私が初めて後見を担当したケースです。その時は、「なんで知的障害者なのに、病院にいないといけないのか」とまずは思いました。病院では人気者でした。だけど、なんで、下の名前を呼び捨てで呼ばれたり、プライバシーも全然ない十人部屋での生活をしなければいけないのかと思えました。そう思いながら、外に出るのが好きだというから、毎月一回彼と外出をすることにしたんです。車が大好きやったから、助手席に乗ってもらってドライブに行ったり、近くを散歩して歩いたり、スーパーに行ってお菓子とか買ったりまするんですけど。お菓子も、手当たり次第かごに入れるんですよ。「今日は二個だけね」と最初に約束をしていますが、「うん」とその時は言うけれども、見たら、もう、どかつと入っている（笑）。

北川 ほしいものが全部（笑）。

尾崎 二個までって言ったなら、最初の頃は子供みたいに床に寝転んで、ワーツとやって、結構大変やったんですよ。それで、レジのところに戻したり、隠したり、特にお菓子を買いに行く時は、いろいろやって必死でした。でも、毎回それを繰り返していると、約束したら、袋二個やったら二個で収まるようになってきたり、前は買っても車の中で病院に着く前に開けて、食べていたんですけど、「約束やで、病院で」と言ったら、徐々にそうだったことが分かっていただけになりました。それから、一回歩いた道とか前に会ったスーパーの店員さんの顔も覚えていくんです。そこで、この人意外と力があるんじゃないのという話になって、生涯病院で暮らしていくのはあかんのちゃうやろうかと。一年ぐらい外出を繰り返して、当時の病院のソーシャルワーカーの方とも相談して、「地域に居せないか」という話をしたので。何度かケース会議を開いて、行政にも入ってもらって。病院にいる間に地域で暮らす練習ができるん違うかな、ということをお社福社法人の方から提案もいただいて、病院にいる間にショートステイをお試しでやりました。それも一年ちよつと繰り返し繰り返しやったんです。今まで病院以外で泊まったことがないから、最初の一泊二日の時は私と一緒に車で行ったんです。私のことをおかんと言っていたんですけど、「おかん」と言っ

て泣きじゃくったのに、次の日、迎えに行ったらケロツとしていて。二回目から「行く」と言い始めて。

北川 ショートステイでのお泊りが楽しかったんですね。

尾崎 楽しかったんやと思う。それもうまいこと一泊から

二泊、三泊と増やして行って、これいけるんちゃうのって。

安心したら人の物も盗らんのちゃうかという話もあって、

新しくできる施設に「いけるんちがうやろうか」と行政の

人にお願ひしました。行政の人も施設の人も、はじめは「こ

んな人、無理ですわ」と言うてかなり渋っていました。で

も、そこでね、いけたんですよ。その施設に非常に馴染

んで、なおかつ、馴染むだけではなくて、「自分のものは

ここにある。ここは誰も盗らない」と安心して、盗食とか

人のものを盗ることもなくなりました。そして単語しか言

えなかったのに、文章で伝えられるようになったんです。

北川 大人になってからですよ。

尾崎 もちろん。最初は五十代だったんです。大人になっ

てからなんですけど、「いや」とか「あほ」とか単語しか

言わなかったのに、「今日な、あそこ行くんや」と文章で

表現できるようになったんです。あとは、テレビとか全然

見なかったのに、テレビを見るようになった。病院では笑

うこともほとんど見たことがなかったのに、テレビのお笑

い番組を声を出して笑って見ている。そんなことってあり

えへんかったのに、病院を退院してその施設に行って、八

年間ですごい成長やねと、職員さんと喜んでいました。で

も残念ながら、先月お亡くなりになりました。心にぽっか

り穴が開いたようです。危篤状態で救急病院に搬送された

時は、職員さんがその日だけで三十人くらいでしょうか、

次々と会いに来ていただきました。病院の看護師さんが「こ

んなことは初めてです。皆さんに愛されていたんですね」

と驚かれました。告別式の日、施設で利用者さんや

職員さん大勢の方とお別れをすることができました。皆さ

んが彼のことを大切に思ってくれていたんだと感じました。

北川 それこそ、尾崎さんと出会わずに、そういう関わり

がなければ、ずっと病院にいた可能性もあったし、そのま

ま病院で亡くなっていたかもしれないということですよ。

尾崎 そうですね。病院の方針としてはおそらく一生入院

をした方がいいだろうという風に思っていたようなんです

けれども。外へ出すということについては、その病院の

ソーシャルワーカーも、役所の担当の人も、ほかのショ-

ートステイを受け入れてくれた法人の職員さんも、みんなが

同じ方向を向いてくれたから、達成できたんじゃないかと

思うんです。私がいくら言っても、誰も協力してくれな

かったら、前には進まなかった。

今につながる原体験の数々……

北川 尾崎さんのお話を聞いてみると、MSWの時代からあさがおに仕事が変わられてからも、利用者の方にとって何がベストかを突き詰めて考えておられるような印象をずっと受けています。それって、どこでそういう感覚になられたのでしょうか？

尾崎 自分自身でよくよく振り返ると、幼少期ぐらいから高校生までの様々な体験があつて、その様々な体験がずっと心の中にひっかかっているんです。それが、結局、今でも続けている力になっているのかなと思うんです。様々な体験って分かりにくいですけど、子供ながらにどうにもならない、いろんな場面に遭遇しました。

たとえば、私の小さい頃、近所に橋があつて、橋の下で暮らす人がいたんです。いわゆる現在のホームレス。私はその橋の下で暮らす人とのふれあいとかがあつて、親には叱られたんですけど、なぜ、この人達は家がないんだろう。この人達はどう思つて生活をしているんだろう。何とかできなのだろうか、小さい頃にそういう疑問があつたのが一つです。あとは、小学校の時にスクールバスに乗つて登校していたんですけど、特殊学級の知的障害をもつ女子と先輩の男の子をめぐつて、ライバル関係になつたんで

す。どっちがバスの中でその男の子の隣に座るか。よく、私はその子の足をひっかけたりしていたんですよ。向こうもやってくるから（笑）。勝つたり負けたりいろいろしていたんですけど、そのお兄ちゃんみたいな人は、どっちにも優しいわけです。だけど、ある時その子が学校で普通学級の子にいじめられていて、その時、私、無性に腹が立つて、そのいじめている男の子に何か石とかをぶつけて（笑）。

原田 結構おてんばだったんですね（笑）。

尾崎 そう（笑）。それで相手は逃げていったんやけど、その子が私にちゃんとお礼を言ってくれて、そこからライバル関係が、友情のようなものになつたんです。そんな体験もありました。それから、精神疾患の方が近所に住んでいて、私が中学校の時にその方が自殺したんです。その自殺の現場を目の当たりにしました。青酸カリでしたが、泡を吹いて苦しんでいる時に私がたまたま行ったんです。それを見て、なんでこの人は京都大学を出て優秀な人やのに自殺したんだろうと思いましたね。入退院を繰り返しているアルコール依存症の人も身近にいたし。それから、高校生になつて友人の家に遊びに行つて、一日中太陽が当たらない地域があることに衝撃を受けたり……。そんなことをいっぱい見て来て、私の中に、解決できないものが高校ぐらいまでたくさんあつたんです。なぜ、この人はこんな

生活をしていて、なんで助けてもらえないんだろう。この人はどう思っただろう。この生活をしてるんだろう。好きでやっているわけじゃないと思うのに、これでいいと思ってるんだろうとか、一緒に考える人はおらんのかなとか、そういうのをずっと考えていて、それが不思議でしょうがない。

北川 そういったものが、どこかでひっかかって、それが積み重なっているような感じですかね。

尾崎 そういう自分の癖がついているのか分からないけど。それと、最初に就職した病院で私を鍛えてくれた先輩MSW、私にとっては師匠ですが、その方のおかげです。その師匠がいつも「なぜと思うことが大事」と教えてくれました。その癖があるのかな。だからいまだに、何か突拍子もないことを言う人とか、行動をする人とか、「どうしてなんだろう?」と関心を持ちますね。そこから入っていくという感じです。

続けていくと、人は変わる

北川 なぜ、と思うこともそうですし、他にはどういったことを大事にされながらお仕事をされているんでしょうか。何か自分の支援をする時の土台みたいなものがあれば伺い

たいです。

尾崎 これも、ご本人さんから教えていただいたこととか、先輩から教わったことで、自分がやっぱり大事にしようと思うことがあって、一つは、想像力。その本人さんの過去のことと現在のことと、未来のことと、すべてにおける想像をしてみるということが、とても大切だなと思っていて。

後見人はよくご本人になりかわってとか言いますけれども、なりかわることは無理だとは思っています。でも、できるだけ本人に近づくという努力はし続けなければいけないと思います。本人に近づくためには、想像力を働かせて、本人が過去にどんな生活をしてきたのか。どんなことを思い考え、どんな経験をして生きてきて、今があるんだろう。そして、今はどういう風に思っているだろう。そして、その人がこれから先、どこでどうやって暮らしたいと思ってるんだろう。どこでどうやって暮らしたらその人にとって、満足できる生活ができるのだろうということについて、想像ができないと実践に移ることができないと思うので、まず想像力というのはすごく大切だなと思っています。思い巡らせる時間というのは、私たちソーシャルワーカーには必要なかなと思っています。

北川 自分も現場で支援していた時は、同じような感覚でした。本当に想像でしかありませんよね。ただ、想像する材

料を一生懸命コミュニケーションの中で手探りで集める。

尾崎 その時に自分の価値観が働いてしまったり、決めつけてしまわないように想像しないといけないですね。想像しないで自分の価値だけで決めてしまうのは簡単ですけど、すごく危険なことだと思います。あとは、明るいソーシャルワーカーになりたいと若い頃から思っています（笑）。私達の時代は、まだ福祉は暗かったんです。老人ホームに行っても、高齢者が何もすることなく、ベッドの上に一日中寝たままで、何も生きがいもなく、なんでこんなところにいるのかと語っていた。こんなことでいいのとか。それから、病院に勤め始めた頃も、大きな病院だったので、手術もいっぱいあって、寝たきりさんをいっぱいつくっていたんですよ。二十人部屋みたいなのがあって、みんな植物状態の人で、全員チューブつけて、その時は、付き添いさんが本当はしてはいけない吸引とかして。そんな二十人部屋があつちもこつちもいくつもありました。そういうのを見ると、今だったら皆さんびっくりすると思います。学生時代に全国社会福祉協議会とか福祉の職場をいくつも見学に行った時も、職員みんなが暗い顔をして、難しそうな顔をして、面白くなさそうな職場やなと思っていました。唯一良いな、希望が持てるなと思ったのは、ボランティアで通っていた障害者施設です。そこは、明る

いとか一言で言うのと失礼なんですけれども、希望がありました。輝いていたというか。そういう施設だったので、障害者施設はいいなと、単純に思いました（笑）。でも、総じて福祉は暗く、福祉職は暗いというイメージがあつたので、できるだけ明るくしたいなという思いが、若い頃からずっとありました。歩くソーシャルワーカー、明るいソーシャルワーカーというのを目指してやっていきたいなと。面接も最後は希望の持てる面接をしたいなと思つていきます。

北川 希望の持てる面接とはどのような面接ですか。

尾崎 未来が開けるような面接をしていきたいな、というのが私の目標です。クライアントも私も、一筋の光がお互いに見えるような、そういった面接ができれば、言うことないと思つています。

それともう一つ。人は変わるといふことを信じるというのが、私達の仕事は大切なのではないかなと思つています。大学で、毎年学生さんにお伝えするんですが、さっきお話しした障害者の方もそうですけれども、そばに寄り添って支援をし続けていくことで、障害や状態は変わらなくても、その人の意識が変わったり、周りの意識が変わったり、環境が変わったりすることで、少しでも前向きになれたり、道が開けてきたりすることは、いくつも見てきたので、そ

れを信じているんです。もちろん、それができないまま亡くなってしまう方も沢山いるんですけど。そこは、もう少し踏み込んだら良かったとか、手を抜いてしまったのではないとか、思うこともいっぱいあります。ですが、その人の力を信頼して、変わることを信じると変わっていく、それは信じたいと思いますね。

今後の展望

北川 今後こういう風にあと何年間やろうかな、みたいなモチベーションとして何か持つておられますか。

尾崎 そうですね。あさがおができて十年経って、第一ステージを一応クリアできたかなという気はしているんです。大津の地で権利擁護サポートセンターもできて、大津という地域の権利擁護のサポートが市民の方にできる体制が一応整ったということ。それから、後見人の仕事の方も充実してきたし、職員もすごく素敵な職員が集まって、もう私がいなくても全然いいように育ってくれています。法人の運営面では決して盤石とは言えないのですけれど、人や体

制面では安心してバトタッチができるかな、とは思っています。ただ、もつと欲を言えば、すべての人にまだまだ権利擁護支援というものが周知されているわけではないので、それをこの大津で、もつと小地域単位で理解をしてもらうために、活動したいです。住民の一人ひとりにそういうことが浸透して関心を持ってもらって、協力もしてもらって、一緒に市民さんと動けるような取り組みができた方がいいなと思っています。そのためにはあと十年ぐらひは必要かなと思っています。

北川 これからという感じですね。

尾崎 だけど、これは私が心配しなくても、誰かがそれをやってくれるということであれば、もう安心できるかなと思います。やっぱり私のこれからの役割があるとすれば、あさがおの中では一番経験が長いので、ソーシャルワーカーとして、後輩に自分の経験をつないでいきたい。あさがおだけではなくて、さまざまな福祉に携わっている人達の話聞いて悩んだり、多くの人に一緒にこの権利擁護を中心とした福祉というものを進めていきたいな、と思っています。

尾崎さんのお話をうかがって

成年後見制度というものにあまり馴染みがなかった私は、「一体どんなお話になるのだろう。難しい法律の話だったらどうしよう……」と、あさがおに到着するまでは正直少しだけ不安でした。ですが、いざ尾崎さんのお話が始まると、そんな不安もすぐに吹き飛び、お話にどんどん引き込まれました。尾崎さんにとつての印象的なケースのお話は、私にとつても印象的なものでした。「後見人は、ご本人になりかわることは無理だけど、できるだけご本人に近づくと努力はし続けなければ」とおっしゃるように、尾崎さんが

いかにその方の人生に対してストイックに問いを発し続けてきたかが、その語りからうかがい知れました。「ケース」とは言うものの、それはまさに「人」と「人」とのひとつの出会いのエピソードでした。

尾崎さんの現在の活動につながる、幼少期の様々な体験についてもお話いただきました。尾崎さんは、その幼少期の体験にずっとひっかかり続けた「自覚者」であり、またその自覚を現在の活動を以てして実践する「責任者」なのだと感じました。（原田）